2018 年 8 月 19 日 川越教会

出会いという神秘

丸山　勉

[聖書]　創世記 24 章 15～21 節

僕がまだ祈り終わらないうちに、見よ、リベカが水がめを肩に載せてやって来た。彼女は、アブラハムの兄弟ナホルとその妻ミルカの息子ベトエルの娘で、際立って美しく、男を知らない処女であった。彼女が泉に下りて行き、水がめに水を満たして上がって来ると、僕は駆け寄り、彼女に向かい合って語りかけた。「水がめの水を少し飲ませてください。」すると彼女は、「どうぞ、お飲みください」と答え、すぐに水がめを下ろして手に抱え、彼に飲ませた。彼が飲み終わると、彼女は、「らくだにも水をくんで来て、たっぷり飲ませてあげましょう」と言いながら、すぐにかめの水を水槽に空け、また水をくみに井戸に走って行った。こうして、彼女はすべてのらくだに水をくんでやった。その間、僕は主がこの旅の目的をかなえてくださるかどうかを知ろうとして、黙って彼女を見つめていた。

24 章 54～58 節

僕と従者たちは酒食のもてなしを受け、そこに泊まった。次の朝、皆が起きたとき、僕が、「主人のところへ帰らせてください」と言うと、リベカの兄と母は、「娘をもうしばらく、十日ほど、わたしたちの手もとに置いて、それから行かせるようにしたいのです」と頼んだ。しかし僕は言った。「わたしを、お引き止めにならないでください。この旅の目的をかなえさせてくださったのは主なのですから。わたしを帰らせてください。主人のところへ参ります。」「娘を呼んで、その口から聞いてみましょう」と彼らは言い、リベカを呼んで、「お前はこの人と一緒に行きますか」と尋ねた。「はい、参ります」と彼女は答えた。

[序] 信仰の幸いを告げる物語

今日は創世記の 24 章が、ご一緒に味わう御言葉として与えられています。ここには、アブラハムの直系の息子・イサクの妻になる女性を、アブラハムが信頼する年齢を重ねた僕（家令）がはるばる旅をしながら探すという物語の一部始終が記されています。もう四千年ほど前の昔話です。そんな時代の、言ってみればお嫁さん探しの話が、今の私たちと何の関わりがあるのだろうかと思いますよね。

けれども、この長い 24 章の物語（創世記で最も長い章）を今日の準備しながら改めてじっくりと読んでみると、これは今の私たち、特に信仰を与えられ、教会に生きている者たちにとって、神様からのとても大きな恵みの語りかけ、また信仰の幸いといったものがここにはあるように思いました。

[1] 受け継がれる神様の祝福

24 章 1 節をご覧下さい。こうあります。**「アブラハムは多くの日を重ね老人になり、主は何事においてもアブラハムに祝福をお与えになっていた。」**

この前の **23 章**では、アブラハムは**妻サラ**をヘブロンの地、マクペラの洞穴に葬ったということが記されています。妻を見送り、そして、今自分も「多くの日を重ねて老人に」なっているわけです。実際次の **25 章**ではアブラハムは直系の息子**イサク**と、側女ハガルとの間に生まれた息子**イシュマエル**、この二人の息子によって葬られているのです。**サラの死を記す 23 章とアブラハムの死を記す 25 章**、その間に挟まれているこの **24 章**で語られていること、それは、神様がアブラハムに約束された**「神様の祝福」が、確実に次の世代に受け継がれていく**のだということだと思います。

神様は**「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」**だと言います。その内実は、代替わりしても、自分の人生が終わったとしても、なお自分に与えられた神様の恵み、神様の祝福は、リレーのように途切れずに引き継がれていく、そのように、**時を超えた祝福**なのだよ、いう意味もあるのではないでしょうか。

［２］神様のご計画が進む

この 24 章の、**アブラハムの僕によるイサクの嫁探しの物語**は、丸で小説を読むかのように、スーッと素直に入ってきますし、その物語はほのぼのしているような印象さえも与えてくれます。私も、この間の水曜日の祈り会の時にも申し上げたのですけれども、聖書の中にはドロドロした人間の醜さとか、卑怯さとか、罪が顕わになっている箇所が多くありますけれども、この創世記 24 章は、**聖書の中でも稀に見る美しい物語**だなぁと思ったのです。

けれども注意深く読んでみますと、**まるでトントン拍子**のようにことが進んでいく、不思議なように**レールが敷かれていく**、ここには人間の入る余地さえないような物語のように思えるのですけれども、いや、そんな「棚からぼた餅」の様な話ではないなぁと思ったのです。**いくらでもこの話は、途中で破綻してもおかしくなかった話**だと思うのです。けれども、破綻しなかった。その背後にあるものは一体何だったのか、それを見てみたいと思いました。

まず、アブラハムから特命を受けた、**アブラハムの僕**が大切な役割を担います。この人は、2 節にもあるように、アブラハムの全財産の管理を任されている信頼の厚い人物です。（この人は、15:2 に出てくる**エリエゼル**なのではとも言われていますが、ここでは名前は隠されてます。）

彼が年老いたアブラハムから、まあ、ミッションを受けるわけです。今住んでいるカナンの地ではなく、遠くアブラハムの故郷まで行って（それはラクダの旅で一ヶ月かかったであろうというほどの距離です）、そこからイサクの嫁になる人を探して連れてくることを誓いなさい、というわけです。彼は**「年寄りの僕」**なのですね。その僕にとってこれはなかなかキツいミッションではないでしょうか。私にはとても重荷です、と断っても不思議ではないと思います。けれどもこの年老いた僕は、それに応えようと出発するのです。9 節にこうあります。**「そこで、僕は主人アブラハムの腿の間に手を入れ、このことを彼に誓った。僕は主人のらくだの中から十頭を選び、**

主人から預かった高価な贈り物を多く携え、アラム・ナハライムのナホルの町に向かって出発した。」

本当に出会えるのかどうか分りません。けれども、彼は出発しました。荷物や贈り物を運ぶ**ラクダ十頭と共に、**というのですから、彼だけではなく、従者たちもいたようですね。そして遂に、ナホルの町の郊外の井戸の傍らまでやってきたのです。ここでこの僕は、**「祈った」**と書いてあります。その祈りは具体的です。13 節の途中からお読みしますと、この僕の祈りはこういうものでした。**「娘たちが水をくみに来たとき、その一人に、『どうか、水がめを傾けて、飲ませてください』と頼んでみます。その娘が、『どうぞ、お飲みください。らくだにも飲ませてあげましょう』と答えれば、彼女こそ、あなたがあなたの僕イサクの嫁としてお決めになったものとさせてください。」**

これはかなりピンポイントな神様へのリクエストですよね。私だったらどうか。早く役割を終えて帰りたいから、初めに現れる人をお嫁さんと確信させて下さいなどと祈ってしまうかもしれません。しかしこの僕は、きちんと**イサクにとって相応しい人、アブラハムの祝福を受け継ぐ家庭を築いていけそうな女性**と出会えるようにと、言ってみれば、妥協などということは初めから頭になく、それだけに**真剣に祈った**のですね。

果たせるかな、その祈りに神様が答えて下さったというのがこの 15 節以下です。**リベカ**が現れ、しかもこの僕が「このような女性を」と祈った通りの行動を目の前で取ったと言うのです。これはもはや**奇跡**ですね。（余談ですが、ラクダというのはとても沢山水を飲むのだそうです。一回に 80 リットルほどと言います。しかも 10 頭です。半端ないです。彼女はこの井戸を何度往復したことでしょうか！）

この僕はじっと彼女の姿を見つめていて、内心驚きながらも、もう確信を持ったのでしょう、運んできた金の鼻輪と金の腕輪を彼女に与えたようです。そしてきちんとした手順を踏んでいきます。「あなたの家には泊まる場所がありますか」「あります」というやり取りがあり、鼻輪と腕輪を身につけたリベカが家に戻るとその**兄であるラバン**はリベカから話を聞いて、井戸の所まで飛んできます。そしてこの僕と出会って「どうぞ、私の家にはあなた方を泊める部屋もラクダたちが休む場所も整えています」と家に招きます。そして招かれた僕が、その時なぜ今自分がここにいるのか、それはリベカ様を見出したからなのだ、リベカ様を是非イサクのお嫁さんとして連れ帰りたい、とラバンやリベカの**父親のベトエル**に語ったのです。

この僕はなかなか**ハードルが高い**というか、今すぐに、というような、無茶に思えることを言うのですね。しかしラバンやベトエルはこれを基本的に受け入れます。ただ、娘リベカと別れる前に **10 日間の時を与えて欲しい**と言うのですね。気持ちは分るような気がします。遠くに旅立つ娘とのその前のしばしの時間です。ところが、

この僕はその時間の猶予を認めないのです。傍から見ていたらハラハラすると思います。ここまで上手く進んでいたのがご破算になってしまうのではないかと。僕は**「わたしを帰らせてください。主人のところに参ります」**と、すぐにリベカを連れて行きたいと言うのです。その後どうなったのか。こう書いてありますね。

「『娘を呼んで、その口から聞いてみましょう』と彼らは言い、リベカを呼んで、『お前はこの人と一緒に行きますか』と尋ねた。『はい、参ります』と彼女は答えた。」（57-58 節）

ここがこの物語の**クライマックス**です。**神様のご計画が現実になった**瞬間です。

［３］無茶振りの連続なのに

この物語を私たちが今聞いて、「ああ、やっぱり神様がなさることは凄い」と言うことは簡単なことですが、それだとちょっと勿体無いと今回私はここを読んで思いました。先程私は、「この話は途中で破綻してもおかしくない話」というようなことを申しました。本当にそうだと思います。言ってみれば**無茶振りの連続**です。**アブラハム**も僕に、本当にそんなことが起こるのか？というミッションを与えました。出て行った**僕**も「こういう女性が現れるように」と、かなり限定した祈りをしました。そして、折角リベカがその思いになっても、**家族の者たち**が賛同してくれるかどうか分らない。しかも、僕はすぐに連れて帰りたいのだと言う。反対されたらお仕舞いだったかもしれません。けれどもリベカに聞いてみますと言ってくれた。そして**リベカ**です。彼女は即答しました。**「はい。参ります」**。

―すごい話だと思いませんか？　ここで登場する者たちは、この物語が成就するために、**不思議に結び合っている**のです。**丸で一つのチームのよう**です。私は「稀に見る美しい物語ではないか」と初めに言いましたけれども、その美しさとは、皆がそれぞれに**絶対的なお方**を見ている、そこから生まれる美しさではないでしょうか。

そもそもの発端は**アブラハムの信仰**です。必ず神様の祝福は受け継がれるのだ、そのためにイサクの配偶者を主は必ず与えて下さるという確信が彼にはありました。それは、この年老いた僕に語った言葉に見ることが出来ます。**7 節**です。

「天の神である主は、わたしを父の家、生まれ故郷から連れ出し、『あなたの子孫にこの土地を与える』と言って、わたしに誓い、約束してくださった。その方がお前の行く手に御使いを遣わして、そこから息子に嫁を連れて来ることができるようにしてくださる。」

アブラハムのその信仰。また**このアブラハムの僕は本当に祈る人**でした。無理難題とも思える具体的な求めを、神様は僕が「祈り終わらないうちに」見せて下さいました。この僕は、**信仰とは、自分たちの頑張りで進めるのではなく、神様により頼むのだ**ということに徹して生きていた人だったのでしょうね。

そして、この僕がリベカの兄や父親に「お嬢様を迎え入れたいのだ」と言いました時に、二人はこう言いました。**50-51 節**です。**「ラバンとベトエルは答えた。「このことは主の御意志ですから、わたしどもが善し悪しを申すことはできません。…主がお決め**

になったとおり、ご主人のご子息の妻になさってください」。ここで二度も**「主」**という言葉が出てきます。皆が自分の思いを貫くのではなく、主を見ているのです。

極め付けはリベカです。これまでの生活がこの日からガラッと変わってしまうのです。けれども何のためらいも見えてきません。潔い、と言いますか。私はあのイエス様の母となった、聖霊によって身ごもったまだ幼い女性**マリア**の口から出た逞しい信仰告白を思い起こしました。**「私は主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように」**（ルカ１：38）。リベカは言い切りました。**「はい。参ります」。**

［４］川越教会の「出会い」の出来事

今日この物語をご一緒に味わうことが出来ることに私は不思議な感じがしています。いよいよ今週の土曜日、近隣教会の方々がお集まり下さり、**「牧師就任按手式感謝礼拝」**を持とうとしています。当日はきっと少し緊張してしまうと思います。けれどもこのことは、神様がこの地に立てて下さった**川越教会を慈しんで**下さって、更にその**伝道が続けられるように、**アブラハム以降ずっと受け継がれている**神様の揺るぎない祝福**を私たちも受け取り、そして**多くの方々と分かち合う**ことが出来るために、神様が**そのご計画の一端**を見せて下さったことに他ならない、と思っています。そのために教会に願いを起こさせ、牧師招聘委員会が設置され、委員の方々が教会員全員の思いを受け止めながら、それこそ**アブラハムの僕のごとく**にひたすら祈り、お働き下さった。その祈りというのも、端的には**「出会わせてください」**というものだったのではないでしょうか。私の側の祈りというのは、「神様、あなたにお委ねしますので、道を開いて下さい」という祈りでした。その中で、神様は**「出会い」**をお与え下さいました。「出会い」とは**神秘**ですね。言ってみれば、私たちは、出会いの背後に、神様がお働き下さる、それがどのように導かれているのか、その過程は人間には分らないのですけれども、**時が巡ってきた時に「ああ、そういうことですか！」**と、素直に**神様の示し**として受け入れることが出来、そこで**主を賛美することが起こる**ことだと思うのです。私たちの教会の出来事を、大宮教会の永町先生は「まるで**コリネウスとペトロの出会い**のようだ」と今度のプログラムのために書いて下さいましたけれども、この創世記のイサクのお嫁さん探しの物語のようでもありますね。

このアブラハムの僕は、神様のみわざに触れ、それに打たれて**主を賛美**しています。26-27 節です。**「彼はひざまずいて主を伏し拝み、『主人アブラハムの神、主はたたえられますように。主の慈しみとまことはわたしの主人を離れず、主はわたしの旅路を導き、主人の一族の家にたどりつかせてくださいました』と祈った。」**

―私たちの毎週の**礼拝**とは何なのか。それは、神様を**賛美**すること以外ではありません。

［結］明け渡して従う「美しさ」

「美しい物語」と言いましたけれども、それは、**神様のご計画が進んでいくその美しさ**、そして、その神様に**「明け渡していく」美しさ**ではないでしょうか。神様はこの歴史の中で生きておられ、今もみわざをなさっておられます。その神様が進めようとされているご計画に私たち一人ひとりも参加するようにと招かれているように思います。その招きを知らされた者は、躊躇するのではなく、「あと 10 日間待って下さい」と言うのではなく、神様の声を聞いた時には、自分の握りしめていたものをも**手離すその信仰**が求められているのではないでしょうか。

私たちが今、**神様の招き、十字架のイエス様の招き**を受けるということは、涼しい顔をして通り過ぎることが出来ないものなのだと思います。神様は、イエス様は、文字通り**ご自分の命を捨ててまで私たちを愛して、「私の愛を受けたのなら、あなた自身を明け渡して従ってきなさい」**と呼びかけておられることを思います。今日の創世記の物語、イエス様誕生の遥か昔の話ですけれども、みんな登場人物が、ある意味、**自分を捨てている**のです。しかもそこには明るさがあります。自らを**明け渡している明るさ**だと私は思いました。私自身も、本当に明るい思いで、神様にこの身を捧げて、皆さんとご一緒に、この川越教会の歩みをご一緒させて頂きたいと願っています。

お祈りを致します。